

最初の出会いを魅力的に

授業びらきでは、生徒たちに「国語を学ぶ意味」について、丁寧に説明するという鈴野先生。また、文法が専門のため、初めて文法の授業をする際は、導入に力を入れるそうです。
 文法は苦手意識をもつ生徒が多いと聞きますが、鈴野先生は、生徒たちの興味をどのように引き出しているのでしょうか。



すずの たかし
鈴野高志

東京都生まれ。茗溪学園中学校・高等学校教諭。筑波大学日本語・日本文化学類卒業。茗溪学園在職中に一時休職し、筑波大学大学院教育研究科にて、主に昭和40年代以降の文法教育を研究。勤務校では中・高国語の他、外国人留学生への日本語指導も担当している。

1 なぜ国語を学ぶの？

最初の授業では、まず、教師自身が自己紹介をします。私は本校に二十二年勤務しているため、生徒のお兄さんやお姉さんを教えている場合も多く、昔のエピソードを紹介したりしながら、ユーモアを交えて、和やかに話をしていきます。

その後、ちょっと真剣な表情をつくって、「これから真面目な話をするよ。みんな、なぜ国語を学んだらう。だって、みんなはもう日本語を読んだり書いたり話したりすることができるよね。でも、中学校

では年間で三百八十五時間、国語の授業があるんだ。なぜこんなに学習しなければならんだらう」と問いかけます。ひと通り生徒の意見を聞いた後、「言葉を理解できて話せる」と、「正しく言葉を理解して、豊かに使える」とは違うということ、具体例を挙げながら説明していきます。また、最近ではインターネットの普及で、膨大な情報から必要な情報を選び取る力が求められるようになり、その力を国語科で培っていかねばならないことや、直接人とコミュニケーションを取ることが少なくなっているため、コミュニケーション

力を国語科で鍛えていかなければならないことなども話します。そうやって、国語という教科がいかに大事で、将来に必要なものなのかを、心を込めて話していきます。また、最初の授業では、生徒たちにアンケートを行います。「国語という教科にどのようなイメージをもっていますか」「国語の授業へ要望があれば書いてください」などの質問項目に答えてもらいます。これにより、生徒の実態を大まかにつかみ、国語科に否定的な感情をもっている子には、担任に様子を聞きながら、フォローしていきます。

2 グループ学習の「約束事」をおさえる

始業のチャイムが鳴ったら速やかに着席する等、授業の「約束事」は、最初にきちんと指導することが大事です。特にグループ学習でのルールは、早い段階から押さえるようにしていきます。グループでの話し合いを効果的に行うことができれば、自然とコミュニケーション力を養うことにつながっていくからです。

私は話し合いをさせるとき、学習リーダーを中心に進めさせています。話し合う前に学習リーダーを廊下を集めて、話し合いのテーマや、どうやってみんなの意見をまとめていけばよいかを指示します。発言が苦手な子に対しては「私はこう思うけど、○○さんはどう？」と、自分の意見をまず示してから意見を求めるとよいことや、抽象的な発言をする子に対しては「例えばどういうこと？」と投げかけて具体的な話を引き出すことなどを伝えます。時間に余裕のあるときは、お昼休みに「学習リーダー会」を行い、リーダーを集めてその日の話し合いについて、振り返りをさせることもあります。

3 文法との出会いも魅力的に

私は、文法学習の「授業びらき」にも力を入れていきます。文法は、ただ活用パターンや助詞の種類を覚えるのではなく、生徒が自分で言葉の法則を見つけ出していくような楽しい授業にしていきたいと思っています。例えば、最初の文法の授業では、

友達に会う
友達と会う

という文章を板書し、「この二つは違うんだらうね。それを考えるために、言葉の『実験』をしてみよう」と切り出します。「会う」を他の動詞（結婚する・けんかする・頼む・電話する・惚れる・話す・話しかける……など）に置き換えて、「に」だけに使える言葉、「と」だけに使える言葉、両方に使える言葉に分類させていきます。そして、「に」だけに使える言葉が「頼む・惚れる・話しかける」であると知ると、生徒たちは「に」は、一方的な感じがすると気づき始めます。そして最終的に、「友達に会う」は、友達に一方的に会いにいったというニュアンスがあり、「友達と会う」は、お互い約束をして会ったというニュアンスがある、という両者の違いを、生徒は自分で考え、導き出していきます。



このように言葉の規則を帰納法的に見いだす方法を示してあげると、生徒は「そうか、わかった！」と明るい表情を見せてくれます。文法は退屈なものでなく、自分で法則を見つけ出すおもしろいものだ、早い段階で体感させたいと、私は思っています。

(談)